

—探求・川にちなんだ万葉集の歌—

# 万葉の川心 第38回

横浜市立綱島小学校教諭 澤井 園子

河に寄する（譬喩）歌（巻第七 一三八〇番歌）

明日香川瀬瀬に玉藻は生ひたれど

しがらみあればなびきあはなくに

夏の宵、仕事から帰るとあわただしく夕餉の支度に取りかかる。枝豆、とうもろこし、冷や奴にトマトサラダ。焼きナス、きゅうりとわかめの酢の物。焼き豚ならぬ煮豚を切って辛子を添える。しめの焼きおにぎり。「夏は新鮮なものをゆでて焼いてそれだけでごちそう」とひとりつぶやき、冷やしておいたビールを取り出す。家族が食卓に着いた。港の花火大会が窓から見えるというので汗だくの大慌てで準備したのだ。「いただきます。」その声を聞いたら安心して弱いくせにビールを一気に飲んでしまった。案の定、酔いはすぐにやってきた。

さながらサバンナに力尽きた象のごとく豊の上に横になる。百年の恋はとづくに覚めているだろうと思いつつ薄目を開けてつれあいを覗き見る。が、動けない。あきらめて目を閉じると、音だけの世界が広がった。扇風機の首が回る。新しくビールの缶が開く。子どもの歓声。その合間に花火の音がドーンと響く。いつの間にか日常という中にとどつぷり浸かっている自分が不思議だった。家族というしがらみから逃れようと若い頃は一人暮らしの夢ばかり見ていた。今やなりふり構わず子育てに追われている。決して自分の思い通りには動かない我が子。親のいうことを聞かずに道を選んできた自分がある。わかっているのに、今、「親」という役になってとまどい揺れている。

「明日香川の瀬瀬には、玉のように美しい藻が生えている。それな

のにしがらみがあるのでなびき合わないことだ。」しがらみという言葉は万葉の時代からあることに驚いた。柵みとは流れる水を塞ぎ止めるため、杭を打ち渡して竹や木の枝を横にからませたものである。清らかな川に玉と呼びたくなるような深い緑の藻がなびいている。柵みがなければ共に寄り添い川の流れのままにいたいのに、それがかなわない。美しい君に会えない・・・そんな比喩につかわれている。他には、柵みさえも越えていく思いを詠む歌もある。それが時を経て転じて、「塞ぎ止めるもの」や「まといつくもの」の意になっているという。写真の碑は奈良県高市郡明日香村の玉藻橋の袂に建っている。淀み、激流、水沫、柵みと川の様々な表情が恋のたとえになっていて、万葉集巻七で、また川の魅力をあらためて感じた。

ほろ酔いの夢の中で思い出した。子どもをベビーカーに乗せてスパーから騙しだまし団地の坂を上ってきたときだった。お花見で顔見知りになった近所の人が声をかけてきた。「お子さん、大きくなったわね。がんばって育てていてお母さん偉いわ。」ちっとも偉くない。みなさんやっていることだし、うちは親子でわがまま放題なのだから。それなのに心から言ってくれなかったその一言が本当にうれしかった。あのとき、すつと楽になった。人はやつぱり人の間でなければ生きられない。そんな単純なことをかみしめていた。「お母さん、どうぞ」「ミニ怪獣は象の母にお水を一杯運んできてくれた。つれあいはすつかり、「父親」の顔でビールを幸せそうに飲み干した。



奈良県飛鳥川